

世界と日本の生物多様性総合評価発表記念シンポジウム 生物多様性のいま ーいのちの共生を、未来へー 実施概要報告

1. はじめに

環境省は、国連環境計画、国連大学、生物多様性条約事務局とともに、本年5月10日に「世界と日本の生物多様性総合評価発表記念シンポジウム 生物多様性のいま ーいのちの共生を、未来へー」を国連大学本部 ウ・タント国際会議場にて開催しました。

生物多様性条約事務局は、「地球規模生物多様性概況第3版（Global Biodiversity Outlook 3: GB03）」の作成をとおして、世界の生物多様性について総合的な評価を実施しました。そして、この5月10日に、生物多様性条約第14回科学技術助言補助機関会合（SBSTTA）が開催されたケニア（ナイロビ）をはじめ、世界12カ所（東京も含めて）でGB03が同時発表されました。

一方、日本の生物多様性の評価については、環境省が平成20年度に設置した「生物多様性総合評価検討委員会（座長：中静透 東北大学大学院教授）」で検討を行いました。今般、その結果がとりまとめられ、GB03の発表と期を一にして、本シンポジウムにおいて発表されました。

シンポジウムは、基調講演と有識者によるパネルディスカッションを中心とした構成で実施され、大使を含む各国大使館関係者が30名あまり、報道機関関係者が約40名、その他企業関係者や研究者を含めて全部で約300人の出席がありました。

2. 背景・目的

世界の生物多様性は、いま、深刻な危機に直面しています。開発/森林伐採などによる生息地の減少、外来種の侵入、気候変動、科学肥料・農薬に依存した農業による水質汚染、自然資源の乱獲などによって、絶滅のおそれのある種や多様な生態系の状況はより深刻さを増しています。このままでは、この地球の生物多様性に支えられている私たちのくらしの恵みも得られなくなってしまうおそれがあります。

GB03は、生物多様性条約事務局が世界各国からの報告をもとに、地球規模の生物多様性の現状と傾向をまとめて作成を進めてきたものです。

生物多様性総合評価（Japan Biodiversity Outlook: JB0）では、過去50年間の日本の生物多様性の状況と現状の評価を取りまとめました。今回、GB03の発表に併せて日本の生物多様性総合評価の結果を発表することにより、生物多様性の保全と持続可能な利用の重要性を広く一般の人々にも認識してもらうことを目的としました。

3. シンポジウムの内容

まず、冒頭挨拶として環境省田島副大臣、パク・ヨンウ氏（国連環境計画アジア・太平

洋地域事務所長）および武内和彦氏（国連大学副学長）の挨拶があった後、アフメド・ジョグラフィ氏（生物多様性条約事務局長）と生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）名誉大使に任命された MISIA さんのビデオメッセージが流されました。武内氏は、GB03 には tipping point（転換点：これを越えると生態系の回復が困難になる点。生態系保全に関する転換点は、確実にあると思われるが、いつ、どこまで生態系が攪乱されるとこのような危機が発生するのかは、よくわかっていない）や、気候変動や日常生活と生物多様性の関連などが重要な点であるとして含まれていることや、生物多様性総合評価では、生物多様性の損失と生態系の管理放棄、外来種、気候変動との関連が議論されていることに言及しました。

プレゼンテーションでは、ザクリ・アブドゥル・ハミド氏（マレーシア政府科学顧問／GB03 科学審査パネル共同議長）より、『GB03 とポスト 2010 年目標』と題して、GB03 の結果と来る COP10（10 月に名古屋で開催）で策定される次の世界の目標であるポスト 2010 年目標について講演がなされました。

続いて中静氏（東北大学大学院生命科学研究科教授／生物多様性総合評価検討委員会座長）より、『日本の生物多様性総合評価について』と題して講演がなされました。渡邊綱男氏（環境省大臣官房審議官）からは、『COP10 とその先に向けた日本の取組』と題して日本政府等の取組について発表がありました。

パネルディスカッションは、植田和弘氏（京都大学大学院経済学研究科・地球環境大学院教授）、吉田正人氏（国際自然保護連合日本委員会会長、生物多様性条約市民ネットワーク共同代表）、藤田香氏（日経BP社 環境経営フォーラム 生物多様性プロデューサー）のプレゼンテーションがなされた後に、ザクリ氏、中静氏、バク氏および渡邊氏を加えたパネリストとコーディネーターの武内氏により実施され、それぞれの立場からの今後の取組（いろいろな立場のステイクホルダーを巻き込むための“主流化”策）等について議論が交わされました。



会場の様子